

## 講 評

庭野正和



14-01

先程は、ポスター発表や動物とのふれあいの中で、大勢のご参会の方々に、積極的な意見交換をしていただき、ありがとうございました。

本日は、「幼稚園・保育園と小学校の連携による動物飼育の教育効果を探る」というテーマで、特別講演、ポスター発表、口頭発表、動物とのふれあい体験をしていただきました。ご参会の皆様方にご協力をいただきまして、充実した大会運営ができたこと、私も運営委員は自負しているところです。

ここで改めまして、テーマに基づいて、本日の大会を振り返ってみたいと思います。

特別講演をいただきました無藤隆先生には、本会の立ち上げのことにも触れられていただきながら、学校で動物飼育をすることの意義について、生態学的に見ても、愛すること、寄り添うこと、世話をすることを通して、素直に表現することの大切さ、さらには、学校教育以外の社会にもつなげていくことが必要である、ということについてのお話をいただきました。

口頭発表1の中島由佳先生からは、本会の鳩貝会長が、2004年に実施して以来の全国調査についてご報告いただきました。なんと、2,000校を超える小学校に電話調査を行って、鳥インフルエンザ後の鳥類の飼育が減少したというデータを示していただきました。明らかになったこのような飼育状況から、哺乳類や鳥類の飼育減少が、動物飼育を通して、心の優しい子どもたちの

心情を育てるということに対する警鐘を鳴らす結果となったのではないかと思います。

口頭発表2の、武蔵村山市立第一小学校の皆様には、発表自体に独創性や明るさがあり、聴く側のところをグッと引きつけてくださいました。先生方が着用されていたTシャツや、お持ちいただいたバッグに、飼育しているヤギへの思い入れと愛着を感じることができました。授業の様子や先生方の会話の内容、4年生での取り組みの内容などを詳しく発表していただきました。校長先生の背中に示してあった「継続」に対する課題は、私たちに重くのしかかるものでありました。

口頭発表3の、横浜国立大学附属鎌倉小学校卒業生の皆様の発表では、6年間継続飼育を行ったからこそ、お一人お一人の学びの様子が手に取るようにわかりました。世話の難しさ、病気にかかったときの戸惑い、そして何より、死に直面したときの心情が素直に語られ、私の胸を打ちました。死を受け入れる難しさ、冷たさの実感、育てることへの責任、あるいは仲間との団結など、なんと素晴らしい体験をされたのだろうと感動いたしました。

その後のポスター発表4件と、群馬県獣医師会のウサギとモルモットとのふれあい体験につきましても、詳しく触れたいところですが、時間の関係でそうすることができず、申し訳ございません。

さて、もう一度テーマに立ち戻らせていただきます。テーマ前半の「幼稚園・保育園と小学校の連携による」という内容の発表は少なかったわけですが、後半の「動物飼育の教育効果を探る」ということに対する成果や考察は、大いになされたと考えております。今回の発表者の方々のような実践があつてこそ、子どもたちの心情的な発達になされるものであると確信いたしました。折しも、次期学習指導要領が、小学校では来年4月から実施されます。学校での動物飼育は、学校の教職員や子どもたちだけでは決して目的を果たすことができません。獣医師の先生方、保護者の皆様、教育

委員会等行政の方々，大学をはじめとする研究機関の先生方が，学校と一体になって飼育活動の意義を認識し，様々な困難を乗り越える知恵と工夫を出し合い，人間性を育てるという課題解決に向かっていくことが求められていると思います。

来年も，この場で研究大会を開催させていただく予定ですが，さらなる議論を深め

るために，ここにご参会の皆様にはまたご参加いただいて，内容をさらに高めた大会にしていきたいと思います。私たち運営委員も，また新たな企画をさせていただきますので，どうぞご支援をお願いいたします。

つたない講評ですが，以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

（本会副会長／武蔵野大学客員教授）